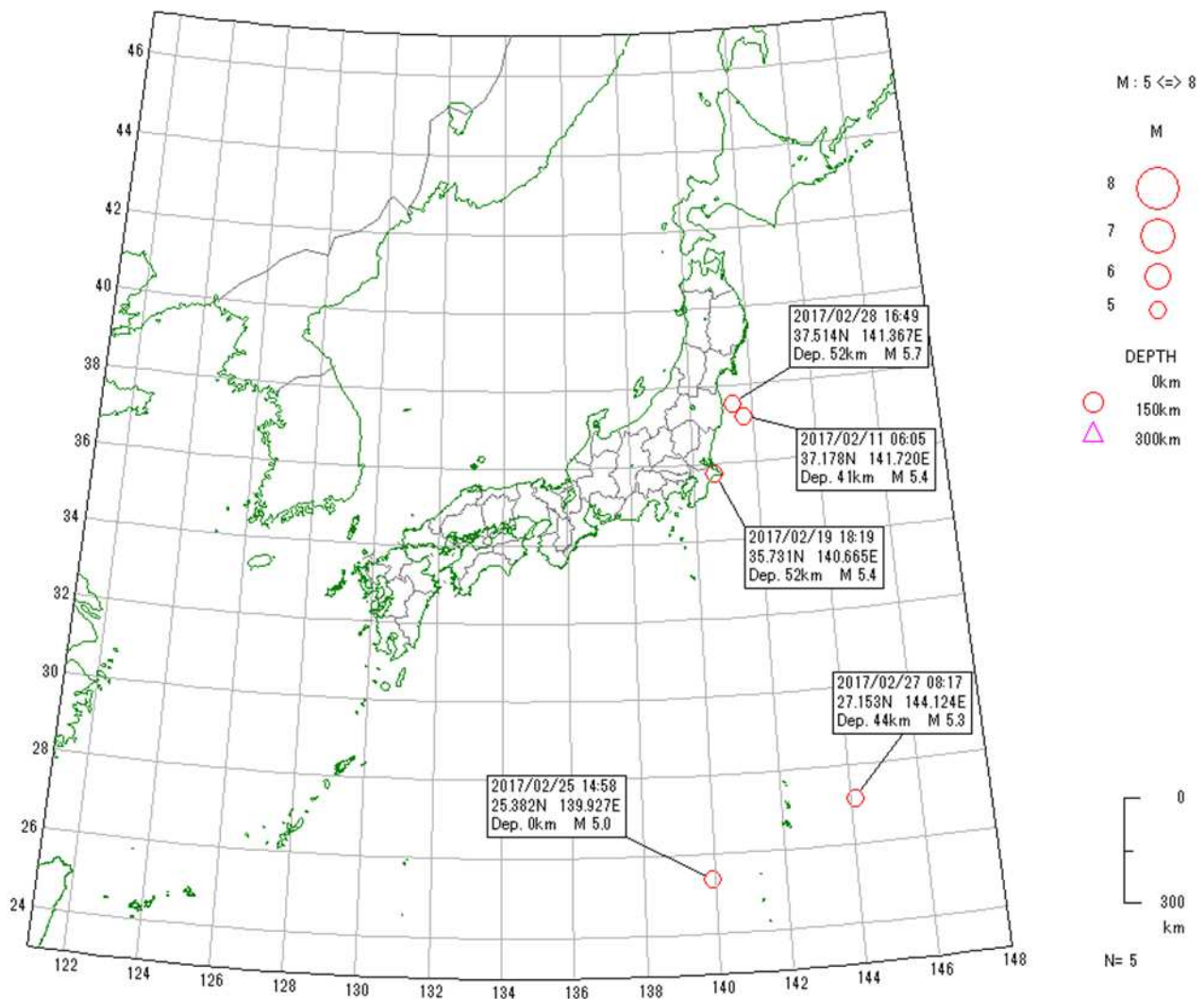


**2017年2月の地震活動**

2月に日本列島およびその周辺で発生した地震のうち、マグニチュード5を超える地震は5個発生しました。これは先月と同じ数となっています。全体としては低調な地震活動が続いています。2月で最も大きかった地震は28日に福島沖で発生したマグニチュード5.7の地震でした。この地震は同じく福島県沖で昨年11月22日に発生した津波警報を伴った地震と異なり、東日本大震災の”普通の”余震です（逆断層型の地震）。東日本大震災からほぼ6年となりますが、余震活動は10年、20年と続くとお考えください。

2017 2/1 0:00 -- 2017 2/28 23:59



東北沖は東日本大震災で大きく東へ動いてしまったため、今後も津波を伴う正断層型の地震（揺りもどしとも言える、東へ動きすぎた事を調整するセンスの地震）が発生する事は確実な状態です。

日本列島全域（特に海域の大地震を対象とした解析）の地下天気図®

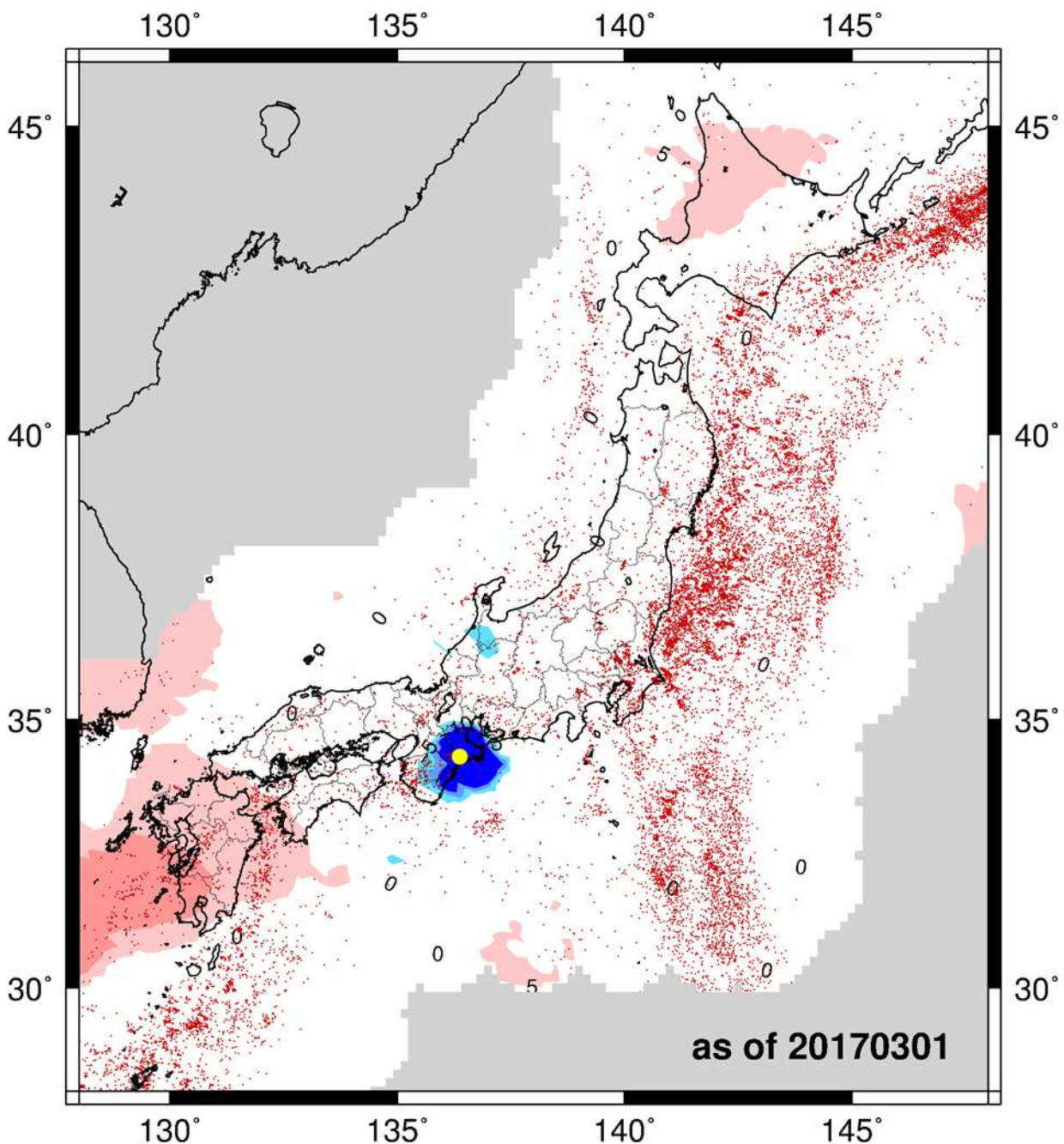
1月30日のニュースレターに引き続き、海域の大地震をターゲットとした3月1日時点の地下天気図です。対象となる地震は日本列島周辺でのマグニチュード7クラス以上の地震となります。



この解析では、2000年以降のおよそ17年間といった長期的な地震活動のデータを使用しており、図の中の赤い点は、この期間に発生した地震です。赤い点の多さからも日本列島で最も活発な地震活動というのは、東北地方の沖合である事がわかります。

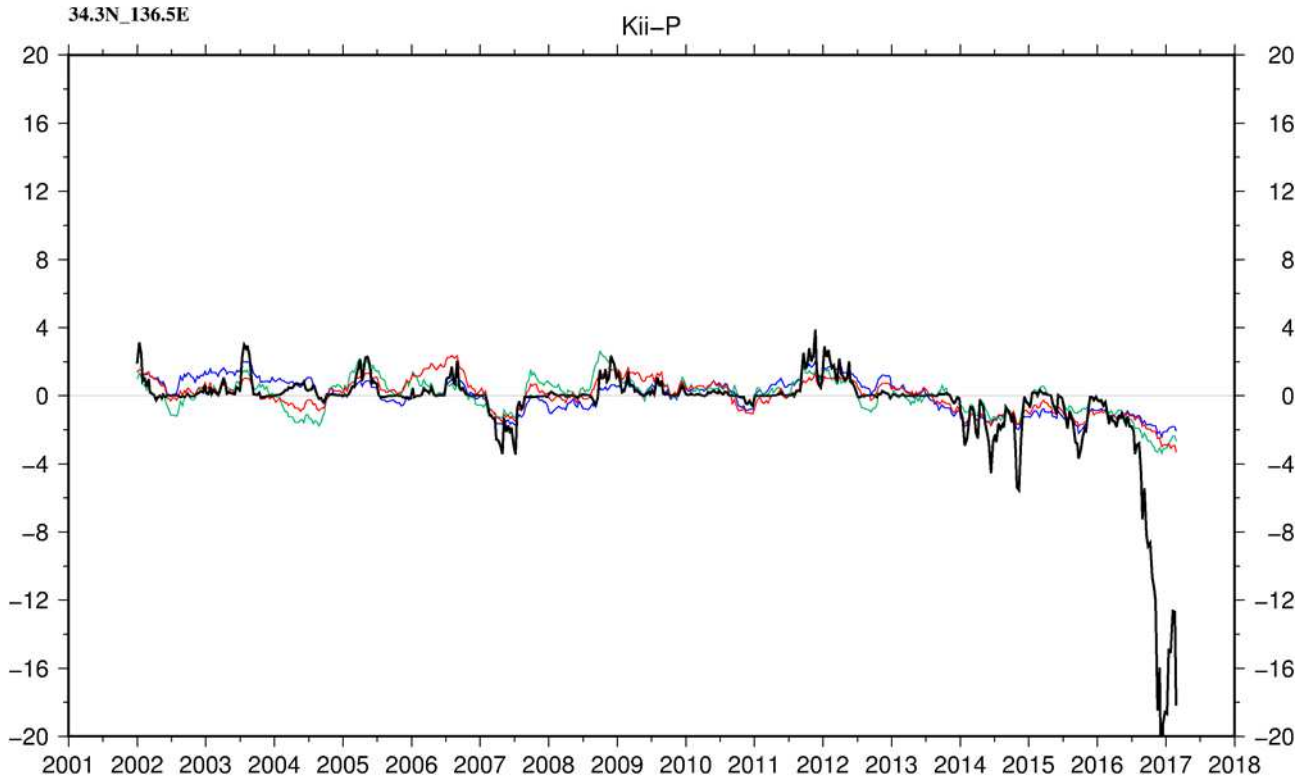
海域(特に西日本)で今後、大きな地震活動が発生する可能性が存在するのは、紀伊半島を中心とした青い領域(地震活動静穏化領域)およびその周辺地域です。長期間のデータを元にしてしますので、前回からそのパターンはまだほとんど変化していません。

なお、注意点として、この地下天気図では東北沖に異常が観測されていませんが、これは2011年の東日本大震災の影響が極めて大きく、異常が存在しないというより、あまりに通常の状態と違ってしまったため、異常がうまく抽出できていない可能性が高いと考えています。東北地方の沖合については「東北地方海域の解析」として別途行っております(前回は2月13日付のニュースレターでお知らせしました)。





次の図は、紀伊半島沖の異常の中心付近の北緯34.3度、東経136.5度の地点（図中の黄色の丸印の地点）におけるRTM値の時間変化です。2016年半ばからグラフが下に大きく振れているのがわかります。下にグラフが行っているという事が地震活動の静穏化を意味します。過去の経験則では、この異常が回復した後に地震が発生する可能性が高い事が知られています。経験則が正しければ発生するとしても、まだ少し時間的な余裕があることとなります。



浅間山の状況

長野と群馬県にまたがる浅間山では、比較的活発な火山性の地震活動が続いています。さらに火山ガスの放出量も高いレベルで続いている事がわかりました。

夜間には火口から立ち上る噴煙に、溶岩や高温のガスが反射して赤く見える火映現象を見る事ができる場合もあるようです。伊豆大島の三原山では、この火映の事を「御神火」と表現しています。井伏鱒二は昭和18年に『御神火』という小説を發表しています。これは昭和15年の三宅島の噴火を題材とした作品です。